

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 工藤 裕子

本論文は20世紀初頭から1920年代にかけての時期を対象とし、蘭領東インド中部ジャワのスマランにおける華人の経済活動について分析したものである。ジャワ島北東海岸の中心都市のひとつであったスマランは、バタヴィア、スラバヤに並ぶ貿易港であり、古くから華人が多数居住する都市として知られた。中部ジャワを後背地にもつスマランを題材に研究することは、単なる都市史研究の範疇を超え、蘭領東インド植民地経済構造の分析、東・東南アジアに国境をこえてネットワークをもつ華人社会の研究などといった点からも極めて重要な研究課題となっている。

本論文の特筆すべき点は多々ある。第一に、ジャワ銀行文書をはじめとしたインドネシアないしはオランダに現存するオランダ語一次史料を渉猟し、華人経済活動の実態を詳細かつ、多面的に明らかにしたことである。ことにマッチや砂糖、茶といった具体的な輸出入品毎の分析に加え、華人企業や金融といった視点からも優れた実証分析を提示している。第二には、台湾籍民の問題などを扱う過程で、日本語史料を巧みに利用し、分析に取り組んでいることは特筆すべきである。旧来、台湾籍民の問題はそれ自体、独立した事象として考察されることが多かったが、本論文ではインドネシア史の範疇の中で総合的にジャワの台湾籍民の存在を明らかにすることに成功している。さらに、第三の特筆すべき点としては、上述のオランダ語史料や日本語史料のほかに、マレー語史料や中国語史料等も巧みに利用していることが挙げられよう。この点は、旧宗主国であるオランダを中心とした先行諸研究が主としてオランダ語史料のみを中心に検討を行ってきたことを考えると、本研究は新たな研究の地平を切り開いたともいえる。華人の経済活動についての重要性は疑うべくもないが、彼ら自身の残した史料は少ない。そこで多言語史料に取り組まざるを得ないが、本論文ではこの点、見事に成功しているのである。

もっとも、本論文には改良の余地がないわけではない。例えば、章構成については、再考の上、改変を行ったほうが、論旨が明確となる可能性がある。また、本論文の時間的対象は1920年代で終わるものの、世界恐慌後のジャワ植民地経済の変化に関する展望をより具体的に念頭に入れた方が、本論文の主旨がさらに鮮明となると考えられなくもないだろう。しかしながら、これらの改良の余地は、本論文の学術的評価を決して低めるものではない。むしろ、本論文で示された研究成果は、現在の到達点にとどまらず、さらに強力にして広範なインパクトを持ちうる可能性を示しているといえる。したがって、本審査委員会は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。